



昭和34年3月の市バス・大野営業所（現在の大野車庫）
写真手前は車体中央に昇降口が見えるボンネット型ディーゼル車

本市の市営バスは、昭和2（一九二七）年3月に運行を開始し、国内の公営バスの中でも、長く貴重な歴史を持っています。開業から78年目のことし4月には、佐世保駅前到新市営バスセンターが完成し、多くの市民にご利用いただけるよう、新たな一歩を踏み出しました。

8両のフォード車から始まる歴史

昭和2年2月、本市は当時すでにバスを運行していた西肥自動車（株）から営業権の一部を買収し、続いて自動車運送事業の免許を取得しました。3月には、佐世保市土木課自動車係として、車庫を八幡町に設置し、交通事業を開始しました。運行車両8両。運行区間は、春日町から日宇駅前を結ぶ本線と、今福

市営バスの移り変わり

- 昭和初期、開業当時のフォード車（16人乗り）
- 昭和17年に運行を開始した電気バスの1号車
- 戦前のガソリン車
- 戦後、自家工場を組み立てた自家製代燃車（木炭車）
- 昭和30年代のボンネット型ディーゼル車
- 昭和29年に登場した箱型リアエンジンバス

今は昔
車掌さんの「発車オーライ」



やすこうち さよこ
安河内佐代子さん

ワンマンバスが普及するまでの車内では、切符の受け渡しや乗降客の確認をする車掌さんの姿が見られました。昭和33年から39年まで、市営バスの車掌を務めていた安河内佐代子さんに、当時は振り返っていただきました。

車掌としての見習い期間は3週間

一人前の車掌になるために、指導の先生に付いて、市内の停留所名と運賃を覚えたり、バスの車内清掃や窓拭き、タワシを使ったタイヤ洗いなども習ったりしました。

週に1度の当直も楽しみみの一つ

最初の配属先は、現在の大野車庫にあった大野営業所。週に1度は5時始発の早朝勤務があり、前夜から営業所内の当直施設に泊まって翌朝に備えました。大部屋にお菓子をもち込んで、まるで修学旅行生の気分で作られたおしゃべりに花を咲かせていたのも楽しい思い出です。

運転士との意思疎通で安全運転

車内では、1区間13円の切符や25円の往復切符などを販売していましたが、発車前に、担当するバスのボンネットを開けて、ラジエーターにパンケツ約一杯の水を入れたり、雪日はほうきで窓の雪を払ったり、道路の舗装状況が悪い時代のことなので、車内の清掃は大変でした。

夜道では、どの辺りを走行しているのか、車掌の位置からは見えないので、バス停が近付いたら運転士さんにクラクションを鳴らしてもらったり、夜間の勤務は10時半ごろまで、その後は、夜間高校の男子学生と交代していました。

当時は、通勤手段が限られていたこともあり、大野とSSK間の朝の車内は、窓ガラスに顔が張り付くほどの混雑でした。手元のブザーを1回鳴らすと「降りる人があるので次の停留所で停車」、2回は「降りる人がいないので通過」、3回は「満員のため通過」というのが運転士さんへの合図でした。

お客さまの励ましや短い言葉のやり取りも、懐かしい思い出です。



昭和36年ごろの安河内さん

年月	主な交通事業のあゆみ	備考	
昭和	2 2	営業権買収、事業免許取得	国内の公営バスの中で早期開業
	2 3	佐世保市土木課自動車係として事業開始	市役所～佐世保駅前は2区間10銭
	29 4	定期観光バスの運行開始	
	30 3		九十九島が西海国立公園に指定
	36 5		市亜熱帯動植物園が開園
和	37 4	市交通局となる	
	40 8	ワンマンバスの運行開始	昭和53年5月完全ワンマン化
	63 4	県内5事業者共通回数券の発売	後に共通ICバスカードへ
平成	4 3		ハウステンボスが開園
	5 4		えぼしスポーツの里が開園
	6 7		西海パールシーリゾートが開園
	9 12	次停留所名付きデジタル運賃表示器を車内に設置 音声で行き先を知らせる音声合成放送装置の導入	公営バスとしては早期のバリアフリー化
	13 4	ワンステップバスの導入	バリアフリー化
成	14 1	県内5事業者共通ICバスカード（スマートカード）導入	全国でも珍しい5事業者共通
	4	電照式行き先表示器（LED）導入 夜間の利用客のために電照式停留所標柱を設置	バリアフリー化
	15 3	ノンステップバスの導入	
	16 3	定期券をICカード化	
4	佐世保駅前に新しく市営バスセンターが完成 市街地循環バスの運行開始 有料シャトルバスの運行開始		